

音脱落をめぐって考える : 日本語史でのその役割

著者	坪井 美樹
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	16
ページ	79(18)-96(1)
発行年	1989-08
その他のタイトル	Some Remarks on “ Loss ” : Its Function on the History of Japanese
URL	http://hdl.handle.net/2241/13544

音脱落をめぐるって考える

—日本語史でのその役割—

坪井美樹

0 日本語の歴史の中で音脱落と呼ばれる現象について考察を加える。本稿の執筆動機は、第一に、従来筆者自身が語法史や語史に関する考察の中で、音の「脱落」とか「転化」とか「交替」とかの術語をその内実に対する充分な理解なしに使ってきたことの反省にある。また第二に、文字や音声記号を用いた「変化の式」に記号化される前に、そもそもそれがどのような現象であるのか、という素朴な疑問を出発点として、あらためてまず音脱落ということについて自分なりに考えてみようと思ったことに発する。従って、本稿の主眼とするところは、新たな事実や用例の発見・報告ではなく、日本語史上の音脱落と呼ばれている幾つかの事例に対する疑問と筆者なりの解釈の提示にある。

音脱落に関する従来の研究では、脱落する音の音声学的ないし音韻論的性質と、前後の音環境の中に脱落を起こす諸条件を探ることとに重点が置かれてきた。近年まとめられた研究成果、例えば柳田征司『音韻脱落・転成・同化の原理』（一九八四・三）、山口佳紀『古代日本語文法の成立の研究』（一九八五・一）などにおいてもまた（それぞれの著書全体の目的は別として）音脱落という現象のとりあつかいについてはそういう目的意識と方法に貫かれているように思われる。

本稿ではこれらの研究と直接切り結ぶのではなく、別な角度から音脱落について考えることになる。本稿では

「音脱落の機能」を探ることに重点を置いて音脱落について考えてみたい。音脱落を、ある音声的条件のもとに生じた必然的現象として見るのではなく、言語主体による該語の把握のしかたの変化の積極的表明と見、音脱落によって変形を加えられた語形によって如何なる職能的・意味的その他の変容が担われたかを考え、ひいては音脱落という、語変形の一つの手段が、日本語史において如何なる役割を果たしたか（果たしているか）をめぐって考えていきたい。小松英雄は音便の「機能」について考察した論文^{注1}の中で、「日本語に、ある特定の変化がおきたという消極的な視点で」とらえるのではなく、「日本語が、なんらかの内部的な必要をみたし、あるいは欠陥をおぎなうためにその特定の変化をおこしたというたちばから」考えてみることの意義を主張したが、本稿も、音脱落という枠組みで呼ばれる事象についての筆者なりの「意図された assumption」による考察である。^{注2}以下の論述は、実証的跡付けに欠けた思弁に傾くかもしれない。しかし、その限界をわきまえ、実証的跡付けによる軌道修正を常に予測しつつ、今後の自らの研究の方向を探る予備的な考察として位置付ける限り、無意味な議論ではないと思う。

なお、本稿の考察範囲は、現代語の例について考える場合を除いて、中古・中世の中央語を中心として必要に応じて前後の時代に言及することとする。あらゆる時代・方処を通じての考察が望ましいのは勿論であるが筆者の力量が及ばない。従来音脱落の研究が盛んであり、そこから導き出された法則が最も盛んに適用されてもいたのは上代語であるが、上代語はしばしば或る語形の存在を推定形として想定せざるを得ない。それに比べて脱落形・非脱落形それぞれの実例が或る程度豊富に文献から採取される中古・中世語を中心とするのである。また、近世語も江戸語は上方との方処的な差違が常にやっかいな問題としてからんでくるので、これまた多くはとりあげないこととする。

1 一般に音脱落がどういう現象として考えられているかを見るために専門的辞典について見ると、いずれも「語形変化」「音韻変化」の類型の一つとして転化・転倒・添加などともにあげられており、次のような分類と例が示されているのが普通である。^{注3}

(A) 脱落部位による分類

- ・語頭音脱落 イマダ▽マダ(未) ウバフ▽バフ(奪) など
- ・語中音脱落 カヘルデ▽カヘデ(楓) フンデ▽フデ(筆) など
- ・語尾音脱落 ホイトー(ホイタウ)▽ホイト(倍堂) ダイコン▽ダイコ(大根) など

(B) 脱落する音の種類による分類

- ・音節脱落 アヲヤナギ▽アヲヤギ(青柳) カハハラ▽カハラ(河原) など
 - ・母音脱落 シラヌ▽シラン(知らん) イチニチ▽イチンチ(一日) など
 - ・子音脱落 カキテ▽カイテ(書いて) ウツクシク▽ウツクシウ(美しう) など
- なお右の他に、同じ音が連続する場合に一方が脱落する「重音脱落」と、ユカタビラ▽ユカタ(浴衣) モグラモチ▽モグラのような変化を「省略」として別なタイプに掲げるものがある。

右のような分類は、直接には西欧言語学における *loss, elision* の分類を受け継いでいるのであろうが、このような言わば外形的な分類が、そのまま日本語の脱落現象の分類に受け入れられている理由は、一つには、これらの脱落現象を機能の面から分類しようとしても、それぞれが個別の語形の変化であるために、総合的に体系化して整理するのが困難であったことにもよると思われる。また一つには、前節でも述べたように、音脱落が生理的变化として必然的・機械的に発生するものという基本的なとらえ方から、その外的な音韻的条件の整理に役立つ分類が志向されていることにもよると思われる。しかし、それにしても右のような類型分けを前提にしてしまうことによって、本来全く異なる動因と目的によって起こった脱落現象を一つにしてしまったり、逆に別なタイプに分けてしまうことによってそこに共通して見出すべき変化の動因を見逃してしまう危険もまた大きいと言わねばならない。

2 音が「脱落」するとはどういうことか。他の語との混淆や意図的な省略などの場合を除いて、或る語がルーズに発音される中で、語形の一部が「落ちてしまう」とはどのようにして起こることなのか。A▽Bの形で示さ

れる、文字や発音記号を用いた音変化の式の、その記号の加除で脱落や添加を言うのは、既にして音変化を結果的にとらえた抽象であるし、場合によっては「視覚的、な trick」^(注4)でさえある。

音の脱落がどのような過程を経て実現していくものか、文献資料の上にはしかその姿を残していない過去の音脱落例を論ずる前に、まず現代語における一例をとりあげて考えてみたい。最近の若年層はスイマセンなる言葉を書き言葉においても普通に使う^(注5)(例えば、大学生が教官に宛てた書状などでも抵抗なくこの姿そのままに書き記される。しかし、このスイマセンは、多くの成年層・老年層にとってはやはりぞんざいな形であって、目上に宛てた書状などでの使用は避けられるものであろう)。これを次のような音変化の式で表してみる。

sumimasen / suimasesen

これで見るとこの変化の前項と後項とでは子音 m が脱落しており、音脱落のタイプとしては子音脱落の音変化ということになる。

ところで、このスイマセンの、若年層の口頭における特別に意識せざる発音を観察するに、この第二音節は母音の【i】というよりもやや張唇の鼻音【ɛ】(通常の【e】よりも口唇の横の引っ張りが強い)の半拍分程度の長さの持続であり、明確な母音【i】への開放を経ず第三音節のマの頭子音【ɛ】に連続するものである。そしてこの発音は実は規範としてスミマセンを選ぶ成年層以上においても口頭での発音として普通に実現されているものなのである。ただし、成年層・老年層にとって、

このままでは、すみませんよ

のスミマセンも、謝罪の言葉としての

どうも、すみません

のスミマセンも、それぞれが如何にぞんざいに発音されようと、語の形として、常にスミマセンの形でとらえられている。これに対して、若年層では、「動詞十丁寧否定」の三つの単位の連続たるスミマセンとは別に、謝罪の挨拶語としてひとまとまりの(つまり一語となった)スイマセンが、語の形として確立していると考えられる。

「このままでは、すみませんよ」も「どうも、すみません」もそれぞれ傍線部の発音は右に述べたような姿、

つまり、第二音節は弱くあいまいに発音されて【a】と【i】との中間的ないし【i】から【a】へ連続的に移っていく発音（今仮りにこれを *suMmasen* と表すことにする）で発音されている。若年層にとっては一方は *スミマセン* に、一方は *スイマセン* に別な言葉として仕立て直されるわけである。そして、いったん仕立て直されてしまえば、この謝罪の挨拶語は丁寧な *su-ti-ma-se-n* と発音されるようになるし、「すいません」の表記の普及から *spelling pronunciation* が *スイマセン* の語形の確立に拍車をかけるだろう。

いくらどんなに発音されても、「このままでは、すみませんよ」が語の形として、「このままでは、すいませんよ」となることは、まず当面ないだろう。この場合の口頭での *suMmasen* の第二音節は常に動詞連用形 *スミ* の形に同定されるだろう。しかし、謝罪の挨拶語としては、非脱落形 *スミマセン*、脱落形 *スイマセン* で「ゆれ」ながら、やがて *スイマセン* が優位を占めていくかもしれない。この *スイマセン* の形の成立について、次のように言うことが可能だろう。即ち、どんなに発音によって新しい語形のその姿は決定されたが、しかし、どんなに発音されたが故に必然的に新しい語形が生じたわけではない。謝罪の挨拶語専用の語として形の上でもその出自の姿とは違った新しい語形が欲せられたが故に新しい語形もまた生じたのである、と。そして、原形であった動詞 *スミ* の連用形の形をこわすことによって、一語としてのまとまりを標示したのである。

3 ところで、CV音節に起こる脱落では、脱落する要素が何であるかによって子音脱落・母音脱落と分けるのが普通である。*スミマセン* / *スイマセン* も、その不等号の前項と後項との間で何が落ちているのかと言えば、一応子音脱落と見られる。しかし、*suMmasen* の段階、つまり、いまだ *スイマセン* の形に仕立て直される前にくずれた発音がなされている段階で、第二音節の子音と母音でどちらが弱化しているかあえて言えば、唇の狭めが明確な開放を見ずに次の音節の頭子音 *m* に連続している点、弱化しているのは母音の方であるとも言える。そしてこの中間形 *suMmasen* は、規範的な形としてはその使用者の年代層に応じて *スミマセン* か *スイマセン* のどちらかに仕立て直される形なのである。つまり、音声表記と音韻表記を使い分けてこの変化を示せば、

【*sumimasen*】 > 【*suMmasen*】 > 【*suimasen*】

/sumimasen/ ∨ /suimasen/

右の二つの式における不等号の意味は決して同じではない。原形とその変化形という限り同じではあるが、音声変化の中間形は前後の二形を結び付ける媒介であり、その姿、この場合第二音節の【m】はその発音に幅を持つ【mi】から【m】さらに【i】、【i】まで連続的である）ものであるが、音韻変化の式としては不等号をはさむ二項は中間項を持たず「飛躍」的な変化である。もう一度言えばスミマセン∨スイマセンを音脱落としてその出発点と到達点を単純に比較する限り子音脱落である。しかし、子音と母音を分析的に分けて考えて行く限りこの音変化のリアルな推移として弱化しているのは（即ち脱落して行った音は）むしろ母音であるとも言える。

さて、右のような曖昧な態度を許さないとしたら、それは科学的な分析を旨とする学問的立場の潔癖さではある。ただ、一般の言葉の使い手にとって、要するにこれはスミマセンのミの部分全体の弱化なのである。これを最終的に子音脱落の形に落ち着けたのは、この弱化したミの音節を母音イに仕立て直したことによる。音節を最小の音の単位とする日本語の基本構造の中で、弱化したミを原形とは違う形に仕立て直すには可能性として次の三つがあったろう。

(1) 次の音節の頭子音に吸収させた形でスマセンとする。

(2) 撥音に仕立て直してスンマセンとする。

(3) 母音イに仕立て直してスイマセンとする。

そして、実際は、音節数を減らすのは、極端な変化として捨てられ、スンマセンは、その撥音の与える印象からぞんざい・下品な感情価値を伴い、結局広く使われる形としてスイマセンが選択されたという^{注6)}ことであらう。

右に、片々たる一事例としてスミマセン∨スイマセンの例を見た。そして、この事例は他にも考えるべき個別的事実を多く含んでいるし、この事例における脱落形のでき方をそのまま過去の日本語に準用するのは危険であるけれど、そのもっとも基本的な筋道、なぜどのような事情で脱落が起こるのかという根本において、いわゆる「音便」もこれと共通するできごとであったのではないかと考えるのである。

4 いわゆる音便を、イ音便・ウ音便・促音便・撥音便のように四類に分け、イ音便・ウ音便を子音脱落、促音便・撥音便を母音脱落と規定する分け方も、かかる事象が起こった結果、弱化した音節がどのような音韻に仕立て直されたかによる分類である。音便を子音脱落・母音脱落に二大別するのは、例えば『音声学大辞典』『音便』の項の次のような記述に見られるように、一方が日本語に促音・撥音という新しい音韻を生む契機となったこととして特別な意義がそこに見出されていることにもよると思われる。

音便現象の、他の音変化と全く異なる第二の点は、音便四種のうちの促音便・撥音便にある。これも純国語音に生じた音変化であることに変わりはないが、イ音便・ウ音便とは全く趣を異にする。後者の子音脱落に対し、これは母音脱落である。しかも促音・撥音は共に日本語の音組織中には存在しなかったものである。それが、拗音のような漢語音からの純粹借用でなくて、純粹な国語音中に生じたことは、日本語の音変化中極めて特異な変化である。

しかし、一方で、結合的变化としての音便現象をとらえる上で最初から子音脱落・母音脱落という別種の変化として見てしまう見方が、かかる現象の素直な把握を妨げている面もあるのではないだろうか。

語がどんなに発音され、CV音節における子音の閉鎖と母音の開放が明確な姿を持たずあいまいに発音されること、そのこと自体は様々な場面で様々な語の部位に起こったことであつたろう。しかし、そのくずれた姿が、原形とは違う一つの語形として意識され、表記の上にもその姿がとどめられるようになることは、そのくずれた姿が原形とは違う何らかの機能（意味上、文法上、文体上、等）を持ち、そのことを積極的に標示したことを意味する。そういう考え方をしてみる時、四段活用動詞連用形に現われる音便も、ある幾つかの動詞に起こったそんな（発音の労力を軽減した）といった言い方がよく行われる。発音がたまたま全四段活用動詞に及んで固定したというようなことでなく、活用語尾の音節が次に続く接辞（例えばテ）と融合して弱化した姿が、或る役割りを担う新しい語形としてそれぞれの事情に応じて原形とは異なる音韻に仕立て直されたのであると考えることができる。

いわゆる音便形の成立については、次の三つの段階が考えられると思う。まず第一段階として、口頭において

ぞんざいな発音がされていても、それはただ単に発音が明瞭・正確でないだけであって、原形（非音便形）との間に何らの価値の相違を持たず、語の形としては全て原形の形で意識された段階。第二段階として、ぞんざいに発音される形が原形とは異なるくずれた語形として、これが原形との対立関係において文体的価値の相違を担い、そういう或る機能を持った語の形として意識された段階。第三段階として、文体的価値を担う機能よりも、動詞連用形の持っていた役割りの一部を分担する文法的機能の方が主となって、いわゆる音便形として確立した段階。文献資料に残る表記との関連で言えば、音便の形を、それを原形とは異なる姿として表記しようという欲求は、第二段階以降に生じたことであるに違いないし、そしてそれに先行して、ぞんざいに発音され、あいまいでくずれた発音を、原形とは異なるどのような音韻としてとらえるかの試行錯誤があったに違いない。

問題を立てるにあたって、なぜ一方では子音脱落が起こり、なぜ他方では母音脱落が起こったのか、のように全く別な音韻変化として考えるのは必ずしも有効ではなからうと考える。そうではなく、等しく同じ部位に起こった音節の弱体化が、イ・ウ・促音・撥音のそれぞれにどのようにして仕立て直されたのか、と問うべきである。

いわゆる音便という名称で従来一括されてきた事象は、濱田敦が言うように「音韻変化という通時論的事実と、音韻交替という共時論的事実とが、更には又、音韻論で取扱うべき事柄と、文法論（形態論）で取扱うべき事柄とが、雑然と入りまじって」いたものであるから、これについて論じるためには別に多くの準備が必要である。

イ音便・ウ音便・促音便・撥音便の四類の音便がなぜそれぞれの姿をとったかについては、音脱落の法則と類推・体系化の作用からこれを論じた柳田征司の論究や、促音便・撥音便について音便を起こす拍の子音と後続の拍の子音との関係からこれを説明した林史典の論究などがある。^(注8) 本稿では、基本的な考え方に関する問題提起に止め、音便については筆者も稿を改めて論じることとしたい。

5 さまざまな語に個別的に生じる音脱落がどのような機能を果たしているか、大きく言って次のようなことが挙げられると^(注9)思う。

(一) 語形を短縮させることによって文体上の価値や待遇表現上の価値の減少を標示する。

(2) 形態素の接続部に生じて語としての複合を標示する。

(3) 原形からの派生や意味の特殊化を標示する。

以下に幾つかの実例にあたりながらその機能を見ていきたい。

6 「有る・居る・来る」等に軽い敬意を含んだ意味を表すワスは、オワスの転と考えられている(音脱落の外形的タイプから言うと、語頭のオが脱落する例はそれほど多くない)。これは、原形より短い語形で待遇表現上の価値を減じた新しい語を生んだ変化と言えよう。

ただし、オワス√ワスがどのような道筋をたどって一体どの音が脱落した変化なのであるか、ということはいさぐさ明瞭ではない。

土井忠生『近古の国語』(明治書院 国語科学講座V 一九三四)では

「わす」は鎌倉時代に「おはす」の上略によって出来た語であるが、(七四頁)

とする。「上略」という言葉は、オワス√ワスの不等号の前項と後項を素朴に比較した場合の差違を述べた以上のものではない。そこにはモグラモチ√モグラのような「音脱落」ならぬ「省略」(語を構成する形態素ないし接辞として把握された一部が略されること)の可能性も含意されている。

もし、オワス√ワスの変化を省略として考えるならば、これは、オワスが「オ(御) + ワス」と分析され、接頭辞としてのオを脱して敬意を低減させた変化であったという可能性が考えられよう。しかし、例えば、ワスが生まれた時代の文献にオワスを「御は(わ)す・御座す」のようにした表記が多数見られるならば、「オ(御) + ワス」という語構成の把握の存在も実証されようが、文献の上でこのような表記はそれほど多くないようである。省略ではなく音脱落の例として考えると、この変化は、オハスがハ行転呼音によりオワスとなることによって類音の連続が生じ、一方が脱落するいわゆる重音脱落の変化と考えられる(重音脱落であるということがオワス√ワスとなる必然性を説明するものでは勿論ないが)。

オワス√ワスを重音脱落の例と考えても、この脱落の道筋は二つ考え得る。その一つは、第一音節が弱化し脱

落するもの。第一音節の母音 \circ の明瞭な開放がネグレクトされ、短く弱く発音されることから第一音節全体が脱落していったのである。オハス（オワス）は、平安時代から江戸時代まで第一拍が低く第二拍が高いアクセントを有していたと思われることも、この変化の可能性を支える傍証となるだろう。もう一つの考えられる道筋は、第二音節ワの唇の狭めがルーズになることによって起こるもの。記号化すれば、

$\text{uoasu} \rightarrow \text{uoasu} \rightarrow \text{uasu}$

となるが、この中間形が存在したことをうかがわせる傍証となる可能性のあるのは、キリシタン資料に見られる「Voaxi」「Voasu」といった形である。日葡辞書には、

○ Vaxe, suru, eta. 来る。普通一般の人や目下の者について言う時に用いられる。

○ Vouaxi, su. Vouaximasu に同じ。高貴の方が…にいらっしゃる、…でいらっしゃる。

○ Voaximaxi, su, ita. Maximaxi, su に同じ。同上。

の項目の他に補遺に

○ Voaxi, su, aita. Gozaru に同じ。すなわち、人が来る、…である、居る。

○ Voaximaxi, su, ita. Maximaxi, su の条を見よ。

の両項がある。

『時代別国語大辞典室町編』の「おあす」の項の【参考】では、「ポルトガル語のローマ字綴では、連母音の oa , ia において、渉り音の影響により、 a を w ・ y と発音される傾向がある」ことを指摘し、バレット文書における Voasu は「来朝後早早くで日本語のローマ字綴に慣れないころに書写したものであって、ポルトガル語の綴字法を混用した形跡がある」ので「日本語の発音をそのまま正確に書写したものと断定できない」とするが、日葡辞書に掲載された Voasu, Voaximasu について「少くともキリシタンの間では、そのローマ字綴とおりの発音も行われていたと考えてよからう」とし、日本人の間でも当時「ぞんざいな発音では「ヲワス」も、「ヲアス」のように発音されることがあったかもしれない」という。所詮は、 uoasu のような形が存在した可能性はあっても、キリシタン資料の Voasu, Voaximasu をもってその存在証明には使えないということだろう。

結局オワスからワスが仕立て直される以前の中間的な形が、どのようなくずれ方をしていたのかは決め手が無いが、どのみちワスという語にとって重要なのは、オワスよりも丁寧さに欠けるというそういう意味上の欠損を、オワスの語形から極端に離れることなく、しかも一音節短いという、形の上にも表した姿に仕立て直されることであった。この点、

キコシメス√コシメス

という変化も、重音脱落という音変化として考えられ、オワス√ワスの対と同じようにキコシメス√コシメスという一拍分拍数を減じた姿が、その原形との対において、原形より一步敬意を低減した(また意味領域も狭まっている。コシメスは「飲む・食べる」に限定されるし、ワスも存在を表わすよりは「来る」の意に用いられることが後世になるにしたがって多くなるようである)新語の創造としてワスと軌を一にしたものとも言えよう。^{注10)}

7 もと二語であったものが、熟合して一語となるのは、本来意味の領域における二概念の連起から一概念化という動きを指すものである。この意味領域における一概念化を語形の上に標示する手段として日本語には連濁・連声・転音・アクセント変化などの種々のものがあるのであるが、ここでは複合を標示する手段として音脱落が用いられる場合について考える。

単語A+単語Bの連続が複合し一語化したことを語形の上に標示するには、本来独立した単語A・単語Bの語形の一部を損傷させることが必要である。しかしまた、それは一語化したところでその意味に単語A・単語Bそれぞれの意味をひきつぐものであるからには、その損傷はできるなら最小限である方がよい。複合を音脱落で標示する場合、例えば複合の結果母音連続が生じたならば、その部分を日本語本来の型であるCVの型に手直するものが最も良い方法であった。しかも脱落させる母音が狭母音であればさらに都合がよいわけである(勿論たとえ狭母音であっても意味の中核を担う母音である場合には脱落は避けられらう)。一方、母音連続が生じない場合には逆にいわゆる音便形をとることによって母音連続を生ぜしめそれによって熟合を標示する場合もある。

中古・中世においても連接部の狭母音や半母音を脱落させて複合を示す例はアイシラウ√アシラウ(会釈)、

ヨメル√ヨメル（嫁入）、サイエン√サエン（菜園）、ツユイリ√ツイリ（梅雨入）、モトユイ√モトイ（元結）など多く見られる。また、接頭辞に転じた動詞連用形に音便形の多用が見られる。一例をあげる。カキコロブ√カキコロブ（搔転）、カキホッソル√カキホッソル（搔細）、カキマガル√カキマガル（搔曲）のように接頭辞「搔く」のカキ、カイ、両形を比べると、カイ、形の方が複合度が強く、逆に言うとかキ、形の方が動詞「搔く」の原義を保持しているようである。日葡辞書に登載された接頭辞「搔く」を持つ語を見るに、カキ、形三一例、カイ、形一五例で、後部要素となる語が共通するのはカキイダク・カイイダクの一例しかない。つまり、日葡辞書ではカキ、形かカイ、形かどちらかの形をそれぞれの標準的な語形として登載しているようである。そしてそのそれぞれに語義記述を見るに、カキ、形の方は、「搔く」という動作のニュアンスがまだ強く残っているものと言えよう。

*日葡辞書の語義記述の例（『邦訳日葡辞書』による）

○カキイダク：両腕に抱き取る。

カイイダク：抱く。

○カキオコス：物を支えながら起こす、または、立てる。

カイオキル：臥している人が起き上がる。

また、*カキダテ√カイダテ（垣盾）、*サキフ√サイフ（割符）など、音脱落を起こした複合語と見られながら、その原形たる非脱落形が文献上実証されなかったり、また、あっても脱落形の多用に比してきわめて稀であったり、文献上むしろ脱落形よりも遅く見られたりするものがある。これらについて、非脱落形が一時明確に存在しながら、それが何らかの事情で文献上にあらわれなかったということも確かにあり得るであろうが、また一方、これらの非脱落形は、

語形上：非脱落形↑↓脱落形

=

=

語義上：非複合 ↑↓複合

という型としての、対立の中にあつて、語形上はその当初から脱落形が使われ、心理的な存在として（だからこそ実際上は幻の語形として）の非脱落形との対立においてその働きを現したものであるという可能性もまた否定できないのではないだろうか。*ツキ（ツク）タチ√ツイタチ（一日）、*ツキ（ツク）ゴモリ√ツゴモリ（晦日）、*ツキガキ√ツイガキ（築垣）などの場合は、脱落形（と見られるもの）の出現時期が早いので、背景にそういう型の対立があつたかどうか大いに疑問であるが。

8 派生標示・意味の特殊化標示としての音脱落について考える。

スギハラ√スイバラ（杉原）

スイバラはスギハラの説形ではあるが「杉の生えた原」の意ではスイバラの形をとることはない。スイバラは「杉原紙」という鎌倉時代以降生産された紙の一種の呼称なのである。

杉原^{スギハラ} 紙名本朝幡州自^{サシハラ}杉原村^{スギハラ}始出^{ハジデ}之故云^{ナリ}爾^ニ（文明本節用集）

これは、意味の特殊化を形態上も標示した例と言えよう。その際、既に地名・人名として特殊化されていたスギハラという形とも異なる語形としていわゆるイ音便の形が選ばれたのである。多くの「ギー√イー」の型の音変化のその類型の中にあることによって、スイバラは語源のスギハラ（杉原・地名）との結び付きを保ちながら（もっともスイバラを「水原」と表記した例もあるから各地で生産されるようになるにつれその命名の由来は忘れられていったろう）、同時に、その語源からの距離（乖離）によってその意味を標示しているのである。^{注12}

カガフルは、各時代を通じて様々な語形を派生させていったが（カガホル・カウブル・カウボル・カウムル・カンブリ・カンムリ・カンモリ・カブル・カムル等）、現代では、

コウムル〔動〕…蒙る

カブル〔動〕…被る

カンムリ〔名〕…冠

という異なる語形による語義分担を生じている。これはカガフルが歴史を通じて、

動詞カウブル→カウムル：第二拍長音形↓蒙

カブル→カムル ……第二拍短音形↓被

名詞カンブリ→カムリ：第二拍撥音形↓冠

の形にその語義と語形のそれぞれの分担を整えようとする流れの結果と言えよう。カガフルは、語義の派生と広がり、それぞれの語義の独立性を派生させた種々の語形に分担させることによって同音多義の混乱を避けてきたのだと言えよう。

9 ある集団内で頻用される、ないしは他集団に対してその集団において特徴的な物事を呼ぶ呼び名は、往々にしてその語形自体特殊な姿を作る。このような「仲間うちの言葉」は、様々なやり方で作られる。例えば、符丁・隠語による呼びかえ、省略、音位転倒などであるが、音脱落もまたかかる「仲間うちの言葉」の作製に手段としてあずかることもあるのではないか。この場合、省略との区別は微妙であるかもしれない。しかしまた省略とは異なる縮約もあることは確かだ、その場合の脱落は、一般の語彙中の語に起こる脱落よりむしろ過度に脱落を起こしてしまう特質がある。番匠言葉とか武者言葉とか古来からそういう語彙が認められそれを指す呼称を持つものもあるように、例えば農業従事者の世界における農耕語彙、船乗りたちの船・航海・気象に関する語彙等々が特殊な姿を呈する習いは古えからのものであろう。そしてそういう専門家たちの間で使われていた語彙中の語が、その語が指すその事物そのものの一般性故に集団内での隠語としての立場を離れて一般に使われる場合、それは一般の語とは異なる語形（音構造）をとることもあったと思われる。

カイ（權）については《ふなびとたちのことば (nautical terms)》としてのその出自の可能性について亀井孝の指摘が既に存する。^{注13)}

ハラオビ√ハロビ√ハルビ（腹帯）

（ハルビの形の口頭での通常の発音では、ルはおそらく音節形成的子音【ɾ】として実現されることが多かったらう。）音脱落のその道筋としていわゆる「音法則」にかなうものであるが、その脱落が結局ハルビの形にまで突

き進んだ、その突き進ましめたものは、騎馬を事とする者たちのその「仲間うちの言葉」の意識ではなかっただろうか。

ヒギイタ√ヒタ（引板）

これもまたその中間形がどのような形であったか（そもそも中間形が存在したかどうかも含めて）はともかく、かかる短い形にまで音脱落を進ましめた「言葉の担い手」たちはやはり農耕従事者たちであったのではなからうか。

脱落は自然な発音の推移に沿う方向に向きやすい。しかし、脱落の結果のその姿が、通常の発音の型に沿わないままに或る表現効果を持って安定することもないわけではない。

ヲサナイ√ヲサアイ（幼）

この子音コの開鎖をネグレクトしたヲサアイという形の出自について憶測をたくましくすれば、これを幼児の舌足らずな発音の姿を自らの語の意味にまつわる衣装としてヲサナイが選びとったということに求めることはできないだろうか。幼児の舌足らずな発音をまねることから女性の使う語彙に入り、一般に広まったという経緯を想定するのである。もしそうとすれば、語の音（連続）の与える印象が語形を変えてしまう点、現代のチイサイ√チイチャイ（チツチャイ）と通う性格の語と思われる。但し、そのような出自の憶測を文献の上で証することは今のところ困難ではあるのだが。

10 筆者は、音脱落を促す心理的要因が存在するということと、音脱落のしかたが音声的条件（言語主体が身につけている発音の型から見た発音のしやすさ）に従うということは、或る面、水圧の存在とその水圧におされて水が流れる時、より低位な方に流れる（つまり流れやすい方向に向かって流れる）ことへの比喻で考えられるように思う。そして、従来の研究は、主に、「水の流れやすい方向」即ち「より自然な音脱落の道筋」を明らかにしてきたと言えよう。しかし、音脱落に関して提唱された「音法則」がいずれも同じ音声的条件にありながら脱落を起こさない「例外」（しばしば数量的にも法則に従う例よりも多い場合がある）を持つことも事実であり、

それは水圧にたとえられるところのものが、比喻の種としての水のように物理法則に従うものでなく心理的な要因であることを物語っているとも言えよう。そしてこの心理的圧力の高まりは時に自然な道筋を跳び越えて音脱落を促すこともある、とそう最初から考えた方がよいように筆者には思われる。様々な心理的要因によって起こる音脱落現象の中に普遍的な脱落の音声的条件（または型）を見る、という従来主流となっていた視点ではなく、種々の脱落の型として現われる事象中に働いている様々な心理的要因を考える方向で今後も考察を深めていきたい。

このように心理的要因を重視すると言っても、音脱落における生理的条件（もつと積極的にその能動性を強めて言えば生理的動因）を無視する立場に立つ謂ではない。ただ、発音運動における労力負担の軽減というような生理的原则を立てるにしても、実は発音しやすいとかしにくいとかいうようなこと自体心理的な要因を含み、単に発音器官の物理的運動の問題としてだけでは記述しにくいものであることは確認しておいた方が良好だろう。可能表現の「見れる」という言い方について、正しくは「見られる」と言うべきなのになぜ「見れる」と言うのだろうか、という問題を、何の予見も与えずに中学生に質問したところ、複数の中学生から「見られる」では言いにくいから」という答えが返ってきた経験を筆者は持っている。そしてこの「見られる」が発音しにくい（まだるっこしく感じる）というのはそれはそれで正直な感想であろう。しかし、可能表現の「見られる」に発音しにくさを感じている同じ言語主体が、受身表現の「見られる」にはとりたてて発音上の困難を感じていないこともまた多い。また、受身の表現がぞんざいに発音される時は、東京地方の言い方では「見らんない」や「見らった」のような発音がなされ、可能の「見れた」や「見れない」とは異なる形の脱落形となるのである。

右は、発音のしやすさ・しにくさ、というのが単に生理的な運動の持つ客観的事実としてあるのではないことの一例である。従ってまた、歴史上のいわゆる「音韻法則」について、例えば「古代においては母音連続が避けられた」とか「これこれの母音連続は許容されなかった」と言う時、それは或る音構造の型に慣れた或る時代の言語主体たちにとって心理的な抵抗を喚起する音連続であったということであり（もつと感覚的に言えば、心理的な抵抗を感じるにすぎないということであり）また或る別な要因が整えば、いつでも例外を生むものであった

と考えておくのが適當であろう。勿論これは安易に例外を例外として放置し、音変化・語形変化の法則性をその実例の上にとことんまで追究してみる試みを軽んずるものではなくない。ただ、得られるところの法則性や傾向性をあたかも物理的法則であるかのごとく考えてしまう危険にもまた充分注意を払うべきであろうと考えるのである。

(注)

- (1) こまつひでお「音便機能考」『国語学』一〇一集 一九七五・六
- (2) 「」の中は傍点も含めて同論文からの引用。
- (3) 日本音声学会編『音声学大辞典』三修社一九七六「音脱落」の項。
佐藤喜代治編『国語学研究事典』明治書院一九七七「語形変化」の項。
国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版一九八〇「音韻変化」「語形」「語形の変遷」の各項。
- (4) 注(1)こまつ論文
- (5) 最近新聞・雑誌においてかなり広くスイマセンの表記が見受けられ、必ずしも若年層にその使用はとどまらなくなっているかもしれない。辞書類ではまだスイマセンの形で立項されているものはないようであるが、例えば、学習研究社『学研国語大辞典』(一九七八初版)や三省堂『大辞林』(一九八八初版)では、スミマセンの訛形や言いかえとしてスイマセンの形を示している。
- (6) スンマセンの形との対比に支えられてスイマセンの形が相対的に上品さを獲得していることと見ることもできるかもしれない。
- (7) 濱田敦『国語史の諸問題』(和泉書院一九八六)第一編五「音便・撥音便とウ音便との交錯」一四五頁
- (8) 柳田征司『音韻脱落・転成・同化の原理』第八節「音便」
林史典「何のために国語史を教えるか」(『応用言語学講座1 日本語の教育』明治書院一九八五所収)
また、小松英雄の前掲論文や、亀井孝「《ーキ》(ー)《ーイ》(ー)のいすとうりあ(ものがたり)」(『亀井孝論文集3 日本語のすがた』(一)所収)もある。
- (9) 音脱落の機能がこの三条にのみ限られると主張するのではない。
- (10) コシメスについては亀井孝「敬語「こしめす」について」(一九三五『国語と国文学』一二一一『亀井孝論文集4 日本語のすがた』(二)所収)がある。
- (11) ツイタチ・ツゴモリについては、注(7)に示した亀井論文や伊坂淳一「へ「つ」もり(晦日)」のはなし」存疑」(『国

語国文』一九八七・三)がある。

(12) こういう〈物の名前〉の語源の常として、スイバラが実は杉原にさかのほらないという可能性もないわけではないが、中世の人々がスイバラを杉原から転じた形としてとらえていたという事実は動かないし、また、その限りで本稿のような解釈も成り立ち得ると思う。

(13) 注(7) 亀井論文

* なお、全般に前田富祺『国語語彙史研究』(明治書院一九八五)を参考とした。他にも、先行研究の成果を利用していただいたが、引用以外一々の出典名を略したものである。